

商都・松本は「イベントの街」という顔を持ちます。コロナ禍や、地球規模の様々な課題を抱える今、「イベント」の形も大きく姿を変えようとしている事、ご存じですか？

令和4年6月26日を皮切りに、11月までの毎月第4日曜日に加え、12月のスピノオフ企画から成る約7か月間に及ぶ『ホコ天 × エコ展2022』。中町商店街振興組合が主催するこの企画は、中でもコロナ禍で可能な、時代を見据えた企画として前年度から開催していた『ホコ天 × エコ展』。今年度は、7か月にわたる開催となり、松本市や近隣商業施設、また20を超える関係団体の協力を得ての開催となりました。

「SDGs」という言葉は多くの人に知られていますが、掲げられた17の目標は多岐にわたり、身近な日常に置き換えるのは容易ではありません

「SDGs」を子どもでも多くの人に知られていますが、掲げられた17の目標は多岐にわたり、身近な日常に置き換えるのは容易ではありません

「SDGs」を子どもでも多くの人に知られていますが、掲げられた17の目標は多岐にわたり、身近な日常に置き換えるのは容易ではありません

「SDGs」を子どもでも多くの人に知られていますが、掲げられた17の目標は多岐にわたり、身近な日常に置き換えるのは容易ではありません

「SDGs」を子どもでも多くの人に知られていますが、掲げられた17の目標は多岐にわたり、身近な日常に置き換えるのは容易ではありません

せん。貧困や飢餓、健康や教育、そして安全な水などの、一見開発途上国に対する支援のように見えるもの。エネルギーや働き方、経済成長に関する目標。さらには気候変動や陸の豊かな等地球環境と平和のための協力を掲げるもの…。そうした難解な目標を、一時忙しい日常から少し離れて、ゆっくりのんびり中町を散策しながら「見て、知つて、作つて、体験して、楽しむ！」というのが、『ホコ天 × エコ展』のコンセプト。

6月～11月の6回で、およそ40種もの企画が催され、気取らずふらっと出かけられる親しみやすさから、実は我が家も度々参加してきました。

るとても良い時間となりました。

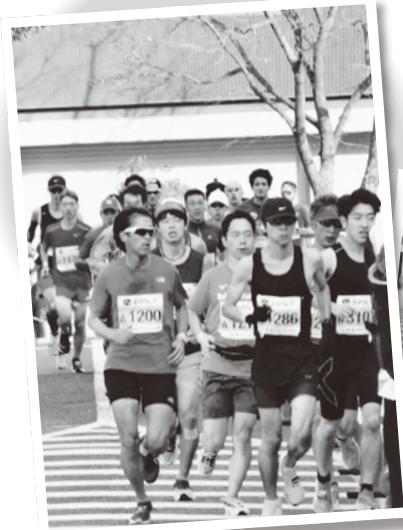


『ホコ天×エコ展』当日の様子

世界193か国が全会一致で採択した文書の名前は、正式には「Transforming Our World. (我々は世界を変革する)」といいます。17の目標は根本的な変革のための手

Presented by
視聴覚委員会

まちかどフォト／ 松本マラソン2022



▼『ホコ天×エコ展』公式HP



バラエティ豊かなイベントの写真や出展・出演者の情報がご覧いただけます。



令和5年1月1日現在	
世帯数	849世帯
人口	1514人
男	721人
女	793人

商店街のイベントがあからざまな集客や売り上げのみを見込んでいたのは、もはや過去の時代なのかもしれません。観光都市であるからこそ、コロナのような不測の事態にも耐え得る、持続可能な商店街のあり方を、『ホコ天×エコ展』が示してくれているよう気すらするのです。

Shopping Street. (私たちの商店街を変革する) のだと。

老舗をたずねて

第四十八回

塩原はきもの店

(神明町)

商都としての松本の中心は善光寺街道として発展した本町、伊勢町、中町、東町でした。月台11三毛れいの元代々

明治3年生まれの先代父は、本町の履物問屋「吉田屋」に勤務した後、下駄製造の「塙原朝勝商店」として、大正8年東町に開業、郊外の梓川や穂高、塩尻などの小売店に販売していました。

当時の運搬はリヤカーと鉄を使つての配達が主でした。東町の火事もあり、松本駅に近い今の神明町に店を構えたのが昭和2年でした。大戦中の休業を除き、昭和20年代後半までは、町内と穂高に

昭和30年 信一7才

ちで、足のトラブルを訴え、当店のサンダルに履き替える方が目立ちました。ハップサンダルとは、当時オードリー・ヘンプバーンが「ローマの休日」で履いていたことから名付けられた名前で下駄に代わるものになつていきました。



現店舗

いからか「才能教育」やSKF・OMFにより「楽都松本」とも呼ばれて久しいが、今では最先端の舞台芸術の発信源にもなりつつある。後任の芸術監督はいまだ検討段階で、空白期間も生じる見込みだが、館や街のこれまでの積み重ねを継承し一層発展できる方の就任を期待したい。

下駄工場があり、十数人の職人が働いていました。庭には常に積み重ねた下駄が干してあり一日中下駄を作る音がしていました。駅近くということもあり下駄製造販売に限らず草履やわらじ、地下足袋を店頭で販売、当時は盆や暮れには下駄を買う大人や子ども行列が出来ていました。

下駄工場があり、十数人の職人が働いていました。庭には常に積み重ねた下駄が干していました。あり一日中下駄を作る音がしていました。駅近くということもあり下駄製造販売に限らず草履やわらじ、地下足袋を店頭で販売、当時は盆や暮れには下駄を買う大人や子どもの行列が出来てきました。

母スズ江の病気等もあり、昭和52年、現店主の塩原信一が家業を引き継ぐことになりました。「はきもの店」の名前は、『足を測り合わせた靴ではなく、下駄草履のように、動きを大事にして調整できる靴を販売しよう』という「はきもの店」の思いから出発でした。

昭和50年当時はモンロー一や
グレースケリー、ヘップバー
ンの履いた高価なエレガント
シユーズとそれに対するの安
価な韓国や神戸のコピー商品
が並走して販売されていましたよ
うです。惑いはありましたが、
当店は日本の靴職人による良
品質のゴムメーカーや東京浅
草の高品質靴にシフトをしは
じめました。

温度60度の熱伸張器と専用の有機液体による拡大調整で、革靴は10分程度で幅広処理が終了します。熱処理中の問題が発生することが多くみられる量販輸入ブランドから国産皮革品に移行することになりました。

からも多くの観客を集めめた。信毎メディアガーデンでの公演や文化企画も彼によるところが大きいのではないだろうか。「才能教育」やSKF・OMEにより「楽都松本」とも呼ばれて久しいが、今では最先端の舞台芸術の発信源にもなりつつある。後任の芸術監督はいまだ検討段階で、空白期間も生じる見込みだが、館や街のこれまでの積み重ねを継承し一層発展できる方の就任を期待したい。

電車通り